
名乗る男

工場長

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名乗る男

【Nコード】

N0638C

【作者名】

工場長

【あらすじ】

いきなりかかってきた電話、その相手は警察だった。

（前書き）

この小説はテーマ小説「名」の参加作品です。

この企画に参加されている方の作品は、「名小説」と検索すると）

「はいりません」読む事ができます。是非、ご覧下さい。

木造の静かな家の中を電話のベルがけたたましく鳴り響く。

電話の側で男は家の者が出ないかと辺りを見回したが誰もいない。男はしょうがなく電話を取った。

「もしもし、磐田^{いわた}です……」

「磐田さんのお宅ですか？　こちらは東京の新宿警察署^{しんじゅく}の者ですが……」

電話の相手が警察なので、男は一瞬動揺したが気を取り直して
「警察の方ですか、一体何のようですか？」

と普段の声色で尋ねる。

「お宅の息子さんの幸四郎^{しゅじろう}さんが車で人を跳ねまして……」

「ええっ、幸四郎が事故を起こしたのですか！？」

家族の者が事故を起こしたという事実には男は驚きの声を上げた。
「はい、相手は七十代のご老人で命に別状はありませんが腰の骨を折るという大怪我を負いました」

警察官は淡々と事故の経過を述べた。幸四郎のわき見運転が原因だったという。

「それで……、幸四郎は今どうしていますか」

男は何を言うべきかとまどいながら思いついた言葉をゆっくりと電話の相手に告げる。

「幸四郎さんですか、おとなしくその場で新宿警察署に捕まりまして、今私の隣で取調べを受けています」

幸四郎が警察に捕まったという事実は男に更なる驚きを与えたようだ。

「幸四郎に……代わってもらえるのでしょうか？　幸四郎と話をさせてもらえませんか？」

幸四郎の声を聞きたい。男の気持ちはただそれだけに注がれている。

やがて警察官に促される形で幸四郎が電話に出た。

「うつ……うつつ……親父い……すまねえ……」

泣きじゃくりながらも懸命に声を絞り出す電話の向こうの幸四郎に男は必死に呼びかけた。

「お前、幸四郎か？　こらお前、泣いているんじゃない、幸四郎ならしつかりしろ！　幸四郎はそんな情けない奴じゃないはずだぞ！」
「すまねえ……親父い……」

しばらく幸四郎と男のやり取りが続いたが、男がなんと声をかけ、励まして電話の向こうの幸四郎は泣きながら「すまねえ」と謝るばかりであった。

「これ以上は息子さんを興奮させるわけには行かないので……」

と警察官が割って入ってきた。もう幸四郎の聞けないのかと男は肩を落とした。

「取調べに当って弁護士の方がこの警察署に來ています。あとはその方とお話ただけませんか」

と警察官は弁護士だという男に受話器を渡した。男は弁護士が一体何を話すのかと思わず身構えた。

「もしもし。私、新宿弁護士協会の吾妻あつまと申しますが……」

「吾妻さんというのか？　幸四郎はどうなるんだい？」

男は電話の相手の弁護士を急き立てる。

「お、お父さん落ち着いてください。あなたの息子の幸四郎さんはこのままでは訴えられて裁判にかけられてしまいます。裁判にかけられるということは幸四郎さんにとってもお父さんにとっても大変不名誉なことです」

なるほど、それはもつともなことだと男は頷いた。本当にもつともなことを言うなこの弁護士は、と男は思った。

「それで……息子が裁判にかけられない方法があるのですか？」

「方法」への予想はついているものの、男は弁護士に尋ねた。すると弁護士は予想通りの回答を出してくれた。

「今ならまだ相手が警察に訴えていないので示談に持ち込めます。」

そこで示談金と弁護士である私の手数料を含めて五十万円を指定の口座に振り込んでいただけなのでしょうか……」

「五十万振り込めば幸四郎は助かるのですね、どこですか！？ この銀行口座ですか！？」

そう叫ぶ男だが、メモの用意はしていない。弁護士は東京のどこかの銀行の口座名を言った。メモを取らなかった男は、慌てていた表情をやめ、急に落ち着いた顔つきになった。

「いや……それにしてもとんでもないことになってしまいましたね……」

「ええ、本当にとんでもないことですが、五十万円、幸四郎さんの将来を考えれば僅か五十万円で息子さんが助かるのですよ、お父さん」

「いや、本当にとんでもないことだ」

男の言葉は冷静になっている。それどころか顔には薄笑いを浮かべている。

「本当にとんでもないことなんですよ、お父さん何をそんなに落ち着いているのですか」

冷静な男の言葉に電話の相手は少々不信感を抱いているようだ。

「だってそうでしょう」

「何がそうなんです」

弁護士の声に苛立ちが見られるのを確認した男は笑いをこらえて、大きく一息ついてから一気に話した。

「東京で事故を起こしたのが確かに磐田幸四郎なら、今あなたとこうして電話で話している磐田幸四郎は一体何者なのでしょう？」

「……！」

電話の向こうで驚いている様子を感じた男は 磐田幸四郎は
とつとつこらえ切れずに笑い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0638c/>

名乗る男

2010年10月11日20時46分発行